



教職大学院

Newsletter No. 110

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科 since2008.4 2018.4.21

連合教職開発研究科のスタートにあたって

福井大学大学院 福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発 研究科長

松木 健一

門出の桜の花も若葉にかわり、いよいよ新学期のスタートです。教育の変動期であるだけに、新入生の皆さんが教職大学院のスタッフと共に活動する中で、どんなことを学び合い、どんなイノベーションを引き起こすのか、2年後の成長に思いを馳せますと、心弾む思いがいたします。

ところで、世界に目を転じますと容易ならざる事態が進行しています。急激な経済のグローバル化の結果、世界的な規模で貧富の差が拡大し、ポピュリズムや原理主義が台頭し、排外的なナショナリズムが世界を席卷しかねない情勢になってきたように思えてきます。子どものころに見たアニメーションは、世界が一つになり宇宙船地球号となって、人類が銀河に羽ばたくものでした。英国のEU離脱、欧州における移民排斥、頻発するテロ、大国の覇権主義、米大統領選のトランプ氏勝利。どれも子ども頃に抱いた「世界は一つに向かっているのだ」という希望が、足元から無碍なく打ち砕かれてしまうような不安が過ぎてまいります。体力に自信がなくなったからの杞憂なのかもしれません。

一見するとこれらの情勢は、ポピュリズムや原理主義が民主主義の危機をもたらしているように見えます。しかし、実際は民主主義が機能不全を起こしているからこそ、ポピュリズム等の台頭を許しているのでしょう。どんなにポピュリズムを憂いても、また、アメリカンファースト・都民ファーストなどの「〇〇ファースト」という発想を批判しても、真正の民意に応えられていない民主政治を改革しない限り、ポピュリズムの跋扈がおさまることはないと思われます。

その民主主義は、教育が支えています。換言するならば、現代社会は教育が危機に直面している社会なのと言っても過言ではありません。私たちは、教師として子どもたちに知識・技能は教えても、世界市民としての資質・能力を本当に子どもたちに培ってきたのか。今こそ、教育に携わる者としての矜持が問われる時なのかもしれません。

さて、私事ですが5月に故郷の役場の完成祝賀会（役場に飾られる幅5メートルほどの壁画の完成記念祝賀会）に参加するため、一両日ほど失礼させていただきたいと考えています。中学校3年間担任をしてくださった恩師が描いた壁画のお披露目なのです。人生という道のりは、必ず立ち返ってみる分岐点がいくつかあるように思います。そして、そこには必ず人との邂逅があります。私にとってよわい90になる篠原義易という美術教師との出会いは、そんな最初の分岐点だったように思います。彼は何も教えてくれない教師でした。担任が授業をする数少ない美術の授業であっても、彼は夢中になって絵を描いておりました。そして、その絵について子どもに意見

内容

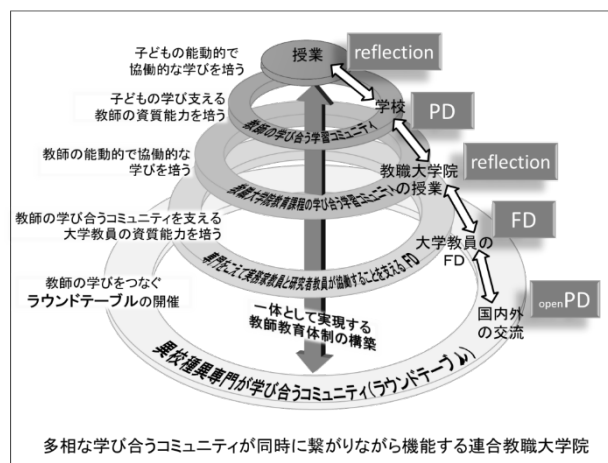
- 巻頭言 (1)
- スタッフ 自己紹介 (2)
- 院生 自己紹介 (4)
- 実践研究福井ラウンドテーブル
2018Spring Sessions 報告 (9)
- 平成30年度開校式 (18)
- 平成30年度教職大学院年間計画 (19)
- スケジュール・スタッフ一覧 (20)

を求め「そうかそう見えるか」と応えながら、自分の込めた思いを語る教師でした。子どもから学び、自分の考えを練り直す、そんな教師でした。

教え指導して、それに子どもが従うことはあっても、子ども自身が変わることはありません。子どもが変わるのは、志に向かって探究し、子どもに対しても意見を求め、必死に変わろうともがきあえぐ人に出会った時です。悩む子どもに寄り添い、目を丸くして子どもの語りに耳を傾け、自分の真意を語ろうと汗流す人と出会った時です。ともに学ぼうとあえぐ教師の姿が、子どもを変えるのです。教育の本質は相互性ですから、このような教師の姿は言うまでもなく当然の姿なのかもしれません。

いま問われている民主主義の危機、教育の危機は、この教育の本質である相互性の危機であるように思えて致し方ありません。教育の危機は、授業の中で教育の相互性を回復することによってのみ解決できるのではないかと思います。互いに意見を聞きあい、語り合い、子どもと教師が共に成長していく教育を実現することこそが、真のグローバル化を実現する術であるように思います。ダイバーシティを障壁から創造へ向かう階段と変えるのは、教育における相互性に他なりません。

本学教職大学院は、本年度より福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学連合教職開発研究科として飛躍いたします。福井県オンリーのモノトーンの大学院から、ダイバーシティの大学院に生まれ変わります。ダイバーシティの中でこそ、共に学び合う、さらにはともに学び合うコミュニティをつくらうとする学校拠点方式の学びが活かされるのではないかと確信しているからです。奈良と岐阜の地で、学校を拠点として教師が学び合うコミュニティができ、



さらに、そこに参画する教師が連合教職大学院という新たなコミュニティを持つことで、分散型で多様なコミュニティを形成することができます。教師が学び合う資質・能力を高めることは、そのまま教育における相互性を支えることになりましょう。

さて、本年度さらにもう一つ新たなダイバーシティな環境が加わります。東アフリカ、エジプト、サウジアラビア、東南アジアより、非常にたくさんの外国人教師がこの会場にやってきます。ここ福井で、日本の学校教育の真価が問われることになりましょう。しかし、恐れることはありません。国の違いを超えて互いに学び合うことで、日本の学校教育に秘めた利点、我々日本の教師自身が気付いていない利点を発見でき、また、世界の教育に目を向ける貴重なチャンスとなるのではないのでしょうか。戦後70年の日本の教育のあゆみと、世界の教育の邂逅に立ち会う喜びをかみしめたいものです。さあ、始めましょう。

スタッフ 自己紹介



稲葉 敦

いなば あつし

4月1日付で連合教職大学院の准教授として着任いたしました稲葉敦と申します。毎日が新たな人や新たなこととの出会いばかりであり、入学してまだ日が浅く緊張した面持

ちの学部1年生の姿に、私自身の心境を重ね合わせる日々が続いています。

3月末までは文部科学省に勤務し、主として初等中等教育段階における教育課程や学習指導に関する仕事をしてきました。学習指導要領の改訂やその趣旨普及をはじめとして様々な業務に携わってきましたが、特に印象深い分野としては、道徳教育や特別

支援教育が挙げられます。直近では情報教育と ICT 活用とを担当していました。こうした分野の業務を通じて私が感じたことは、これらはそれぞれ固有の課題を抱えつつも、これらに共通した難しさがあるのではないかとことです。すなわち、いずれも特定の教科等のみで指導が完結するものではなく、学校の教育活動全体を通じて、あるいは教育課程全体の中で必要な指導内容を配列して実施するものであるということ、また、教師一人ひとりがこれらの指導についての力量を高めるとともに、学校全体で組織的に取り組む必要があるものと言われているということです。しかしながら、こうした分野の重要性は認識されつつも、では、具体的にどのように取り組んでいけばよいのか、多くの先生方が難しさを感じておられるのではないのでしょうか。

実際、学校が対応すべき教育課題は様々であり、一人の教師がその全てに通じることは極めて困難と言えるでしょう。そうした中、適切な役割分担と管理職のリーダーシップの下で、教師一人ひとりがそれぞれの得意分野で力を発揮し、効率的に協働しながら、結果として学校全体の指導力を向上させていくにはどのようにすればよいのか、さらに、その実現のためには、教育委員会や国はどのような支援を講じればよいのかといったことを、もちろん明確な答は得られていないのですが、考えてきました。日頃そうした思いを持っていた中で、日々の教育活動の中で生じる具体的な課題を同僚の教師と協働して解決していくことを通して、個々の教師の力量を高め、学校の組織を改革し、授業を改善するという理念の下で、全国の注目を集めている福井大学連合教職大学院という教師教育の最前線に身を投じることとなり、何らかの貢献ができればと願っているところです。

私は長く教育行政のみに携わってきましたので、教師の経験はありません。学校の先生方からすれば、半分「関係者」であり、半分は「部外者」と感じら

れるかもしれません。しかし、そうであるからこそ、現職の先生方や教師を目指す皆さんに新たな視点を提供することもできるのではないかと考えています。「社会に開かれた教育課程」を実現する必要性が言われ、今日、学校が地域や社会との関わりを持たずに教育を実施することはもはや考えられなくなっています。同僚の教師と協働し、あるいは、管理職やミドルリーダーが他の教員を牽引して学校全体で組織的に、さらには、地域や企業等の人々と連携して教育に当たるという、これからの教育を展開していく上では、教師以外の人々に学校や教育についての確に伝えることが必要となってくるのではないのでしょうか。その難しさと大切さをお伝えできるのではないかと考えています。

また、先生方が指導力を高めるだけでなく、人間的魅力を磨いていくこともたいへん重要であると感じています。専門の教科等に限らず、むしろ専門外のことや趣味的なことであっても、何かに興味・関心を持ち学び続けることが、その人の魅力に繋がっていくのではないのでしょうか。そうした学び続ける姿勢は、私自身も大切にしたいと考えています。

教師一人ひとりが指導力を高めつつ、それぞれの人間的な魅力や得意分野の力が発揮できるようにするとともに、互いに効率的・効果的に協働しながら、また、学校外の力も上手に借りながら、学校全体としての指導力を向上させていくためには、一人ひとりの教師や管理職はどのように取り組んでいけばよいのか、また、そのための行政の支援はどうあるべきなのか、皆さんと共に学びながら、考えていきたいと思っています。

福井大学に赴任すると挨拶した際、多くの方から、福井大学や福井県への期待あるいは注目の言葉をいただきました。職責の重さを感じると同時に、意義深い仕事ができるのではないかと期待も抱いています。どうぞよろしくお願いいたします。

院生 自己紹介



桑原 寿々奈

くわばら すずな

はじめまして。今春より、教職大学院の教職専門性開発コースの一員として学ぶことになりました、桑原寿々奈です。出身は福井県ですが、大学は兵庫県の関西学院大学に在籍していました。大学では、教育学部にて中学校社会一種と高等学校地理歴史、公民一種の免許を取得しました。また、体育会陸上ホッケー部に所属し勉強と部活動の両立に励んでいました。大学院では、3年間の小学校免許プログラムを使い小学校教員免許を取得したいと考えています。

さて、私なぜ教職大学院に進学をし、小学校プログラムを履修しているかについて、私の尊敬する二人を挙げて紹介をしていきたいと思います。一人目は、私が大学時代に地元の高校へ教育実習に行った際の担当教諭です。私が大学院への進学を意識し始めたきっかけは、その先生に出会ってからでした。その先生は大学院を卒業された方で、日本史が専門でした。その先生の授業は私が高校生の時に思っていた「日本史は暗記中心科目」というイメージを覆すものでした。日本史好きでない生徒でも、面白くてわかりやすいと感じられるような授業の工夫、そ

して授業づくりの際も私でも面白いと感じられるような授業のネタがどんどん出てくるような先生でした。その時、私も大学院に行けばこの先生みたいになれるのかなと思うようになりました。二人目は、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんが沼っち先生こと、沼田晶弘先生です。現在は東京の小学校教員として活躍されています。私はインターネットの情報から沼っち先生を知りました。沼っち先生の様々な取り組みを知っていく中で、「学校」で勉強することの意義や学びの本質を再認識し、出会ったことはない先生ではありますが、インターネットの情報や本から楽しそうに教員をしておられる沼っち先生の姿に、小学校教育ならではの教育実践の可能性に惹かれ、小学校にも興味を持ち始めました。

これからは、福井大学附属義務教育学校前期課程にインターンでお世話になることが決まりましたが、大学時代の実習校とは違った方針や取り組みが多く、改めて明確な答えがない「教育」の現場で働くことの面白さや難しさを感じています。だからこそ、このインターンひいては大学院での学びを通して多くの方々の教育観を知り、自分の教育観というものを形成していきたいと思います。これから、どうぞよろしくお願いいたします。



澤崎 俊之

さわざき としゆき

4月より教職開発専攻の授業研究・教職専門性開発コースに入学しました澤崎俊之と申します。専門は社会科、取得している教員免許は中学校社会科1種、高等学校地理歴史1種、高等学校公民1種になります。皆様には、これから2年間色々とお世話になるとと思いますが、どうぞよろしくお願い致します。

私は昨年度までは早稲田大学人間科学部人間環境科学科に在籍しておりました。大学では、人間科学部に在籍している特性を活かし、「人間」という題

材をあらゆる方法や考え方から紐解いていき、多彩な学問領域に触れることにより、幅広い分野における学びを深める日々を過ごしました。大学時代の学びはこれまではよく言えば、幅広く学ぶことができた環境でしたが、その反面、時に自分が専門としている分野は何であるのかと明らかではないことも多々ありました。しかし、幼い頃から夢である教職につくという目標を見失うことなく日々の学びに取り組むことにより、これまでの自分自身の学びが全て将来的に教師として教壇に立った時に繋がると考え、日々の学びに取り組んできました。これから教職大学院で過ごす2年間においてはこれまでの自らの学びを通して構築されてきた「専門性」を活かし、

将来的に教師となるために必要な専門性を深めていけるように励んでいきたいと思います。

教職大学院で過ごす2年間では教師となるために必要な専門性を身に付けていく上で、長期インターンシップにおいては「より良い社会科の授業作りの研究」と「実践的な生徒指導力の養成」の2つを目的とし、長期インターンシップに取り組んでいきたいと思っています。「より良い社会科の授業作りの研究」では現職の教員の方々の社会科の授業参観や自ら社会科の授業実践を通して、より良い社会科の授業とは一体どのようなべきか模索していき、より良

い社会科の授業について研究していきたいと思います。また、「実践的な生徒指導力の養成」では長期インターンシップの中で生徒の成長に関わる中で、少しでも生徒の成長の手助けとなるように働きかけることにより、実践的な生徒指導力を身につけることに繋げていきたいと思っています。以上の2点を長期インターンシップにおける主な目的とし、この2つの目的を達成することに重きを置くだけでなく、幅広く教師となるために必要な専門性を深めていきたいと思っています。

未熟ではありますが、皆様どうぞよろしくお願い致します。



玉村 香奈 たまむら かな

はじまして。本年度、授業研究・教職専門性開発コースに入学した玉村香奈です。社会人を経験し、まさか再び大学院で学ぶ選択をするとは思っていませんでした。本コースで学ぼうと

思ったきっかけは、地元福井県の小学校で外国籍児童の日本語支援に携わったことです。小学校で日本語支援員として働く前は、約2年半、青年海外協力隊員としてコスタリカの大学で日本語を教えていました。帰国後初めて子どもに日本語を教え、子どもの日本語教育と大人の日本語教育は全く異なっていることを実感し、子どもの日本語教育の方がより課題があると感じました。たとえば、日常のコミュニケーションに必要な日本語を学習しても、教科の中ではその成果はなかなか発揮されず、在籍学級で学習活動に参加することが難しいこと、その結果、発達段階に応じた学習内容の習得が難しいこと、母語も日本語も年齢相応の言語能力を身につけていない状態（ダブルリミテッド）に陥る危険性があることなどです。

実際、日本語支援教室では、明るく活発に学習していても、学級活動や学校行事では、日本語が上手く話せない、理解できないために参加しているけれど、見ているというような「お客さん」になってし

まう子どもの姿や、母国の学校と習慣やルールの異なる日本の学校になかなか適応できないことでストレスを感じる子どもの姿を見ました。

小学校教諭免許もなく、小学校教育の知識や児童の発達段階についても十分理解できていない私にとって、適切な支援ができていないのかを悩みながら過ごしていました。そのような中で、小学校における日本語支援の在り方や学校・学級全体において日本人児童も外国籍児童もともに学び、参加できる学習の在り方について研究したいと思いはじめました。

これからの3年間、インターンシップを通して、まずは、小学校における学校・学級運営、子どもの発達段階に合わせた指導や授業づくり等の基本を学びながら、小学校教諭免許の取得を目指していきたいです。そして、それを踏まえ、学校における多文化共生や外国籍児童の支援の在り方について学びを深めていきたいと思っています。

4月からのインターンシップでは、2年生の教室に入らせていただきます。2年生は小学校生活も2年目となり、いよいよ本格的な学習がスタートする時期でもあります。この時期の子どもの教育を実践的に学べることはとても楽しみであり、現場の先生から多くのことを学び吸収したいと思っています。

これから3年間ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。



津野 慎平 つの しんぺい

はじめまして、今年から連合教職大学院の授業研究・教職専門性開発コースに入学することになりました津野慎平です。昨年度までは、福井大学の教育地域科学部学校教育課程障害児教育コースに所属していました。免許は、小学校教諭第一種、幼稚園教諭第一種、特別支援学校教諭第一種を取得しています。

大学生活では、卒業研究が私の中で強く印象に残っています。卒業研究では、幼稚園で遊んでいる子どもの係わり手の在り方を研究していました。子どもたちの輪の中に自らが入り、その子たちの遊びから、関係の移り変わりや心情の変化などの状況を読み取ったうえで、私自身がどのように係われれば遊びが展開したり関係が広がったりするかを探りました。最初は、目の前で起きている子どもたちの状況が上手く読み取れず、なんとなくこうするとよいのではないかという曖昧な考えで、手探りのように子どもたちに接し、子どもたちが離れていったり機嫌を悪くしたりすることが多くありました。卒業研究のゼミでは、ゼミの仲間や先生から助言をいただきながら、記録からその時に起きた子どもたちの状況を読み取り直しました。それらを踏まえて自分の係わり

は何が良かったのか、何がいけなかったのか、というように子どもたちへの係わり手のあるべき姿を考えました。それを繰り返すうちに、私の係わり方は変わっていき、子どもたちの状況に適したものになっているかという視点を持つようになりました。また段々と子どもたちとの遊びも子ども同士での関係が広く深いものになっていきました。今振り返ってみますと、子どもたちの輪に入るという実践をして、ゼミの中で記録から子どもたちの状況を他の人と読み取り直し、次の実践に活かせるよう考えていく、というサイクルがあったから自分の係わり方がより良いほうに変わっていったのではないかと考えています。

連合教職大学院での長期のインターンシップでは、特別支援学級の配属を希望しています。特別支援学級では学級内や、通級による児童との関係、さらに交流学級と様々な児童の状況があります。また大学院ではカンファレンスや、ラウンドテーブルなど、他の人と実践を語り合いお互いを高め合う機会があります。児童の状況に適した係わり方ができるよう、学校での実践、カンファレンスなどでの他者との記録の読み取り、次の学校での実践へ活かすというサイクルをより深めていければと考えています。まだまだ未熟で至らない点も多いですが、よろしくお願いします。



三村 桃加 みむら みか

はじめまして。教職大学院教職専門性開発コースに入学した三村桃加です。

昨年度までは、金沢大学人間社会学域人文学類西洋史コースに在籍しており、ヨーロッパを中心とした歴史について学んでいました。子どもたちに教育していく上で、大切になってくることは、子どもたちに勉強する意義を感じ取ってもらうことだと考え、「歴史とは何か」「歴史を学ぶ意義はどこにあるのか」という命題を軸として、研究を行ってきました。歴史は、現在をよりよく生きる、未来を創造するための材料であることを子どもたちに認識してもらい、将来社会を生きる上で役立つものにしてほしいと考えていま

す。そのための基礎として、やはり子どもたちの興味関心を活かすこと、達成経験を多く設けることが重要だと考えています。私自身も、今までの学校生活や部活動、大学生活でのアルバイトやボランティアを通して、学びにおける興味関心や達成経験の必要性を痛感しました。

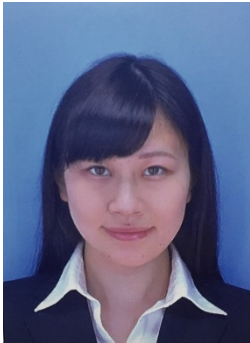
しかし、大学の時の教育実習では、子どもの様子や学びの姿から、授業を考えるのではなく、一つひとつの教材に焦点をあててどのように子どもたちが楽しく学べるのかといったことに重点を置いていたように感じます。

長期インターンシップでは、4月から福井大学附属義務教育学校前期課程にお世話になっていますが、その中で様々なことについて実践的に学び、子どもとのコミュニケーションのなかで授業や活動につい

て考えていきたいです。子どもたちは何に興味関心をもつのか、何を達成することで自己の成長を実感できるのか、その答えは子ども一人ひとり違い、その行程も同様に違います。そのため、子どもの姿を捉えることは必要不可欠であり、子ども成長には教師の成長が欠かせません。教職大学院での長期インターンシップやカンファレンス、ラウンドテーブルなどの学びあいの場は、私自身の成長を促す、とても良い環境であると考えます。その様な環境の中で、

一つひとつの経験を大切に、主体的に学んでいきたいと思っています。また、実践を深めるための省察や交流の場があることも教職大学院の魅力だと感じます。実践過程・組織をめぐる省察や研究によって、自分の実践を客観的に考えたり、自分だけでは気づけなかった視点を得たりしながら、日々の実践をより深いものにしていきたいと考えています。

三年間という短い間ですが、よろしくお願い致します。



家高 里佳 やたか りか

はじめまして。今年度、教職専門性開発コースに入学しました、家高里佳です。昨年度までは、福井大学教育地域科学部の音楽教育サブコースに所属していました。専攻は声楽です。取得免許は、小学校一種、中学校（音楽）一種、高等学校（音楽）一種、幼稚園一種、特別支援学校（知的・肢体不自由・病弱）一種です。

学生時代を振り返ると、大学では教員になるということ強く意識していたため、子どもたちと関わる機会を求めてアルバイトやボランティアに取り組んでいました。アルバイトでは、個別指導塾及び家庭教師を、ボランティアでは福井市言葉の教室や福井大学附属幼稚園の活動支援に参加したり、特別支援学校の子どもにむけてコンサートを開いたりしました。大学内で取り組んでいた探求ネットワークでは“それいけ!!探検隊”に所属し、小・中学生の子どもたちに合わせた活動（キャンプ等）の企画・運営を行いました。昨年度は、福井大学附属義務教育学校第1学年において低学年支援員として週5日子どもたちと一緒に活動していました。

音楽活動に関して、3年次5月に学内アカデミーホールにて音楽科ミニコンサート、4年次3月にはハーモニーホールふくいにおいて卒業記念演奏会を企

画・運営しました。コンサートを企画し、それを実際に運営することは容易ではなく、何度も仲間と意見がぶつかったり行き詰ったりと苦しい思いをしました。それでも、コンサートをより良いものにしたという思いがこの企画を成功へと導いてくれたのではないかと思います、この経験はこれからの大学院生活、また教員生活においてとても重要なものであると感じています。

私は将来小学校において、豊かな心をもち意欲的に学ぶ子どもを育成できる教員になりたいと考えています。豊かな心についての解釈は多岐にわたりますが、まずは認知の分野において自然や美しいものに感動する心、感受性の豊かさを取り上げ、知覚と感受の結びつきによって子どもたちの学びや生活をより豊かなものにしていきたいと考えています。また、気がかりな子ども、障害のある子どもに対して適切な支援を行える教員になりたいと思っています。自身の思い描く教員像に少しでも近づくためには、長期的な見とり、丁寧な見とりによって、目の前の子どもに向き合い考察し続けることが必要であると考えます。長期インターンシップではそのような丁寧な学びによって教員としての力量を培い、また生涯学び続ける身としての基盤を築いていきたいと考えています。これから、どうぞよろしくお願い致します。



西澤 央泰 にしざわ ひろよし

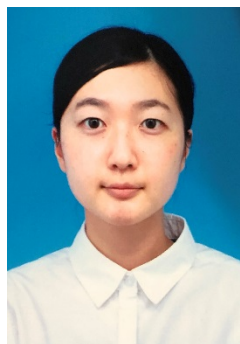
はじめまして。授業研究・教職専門性開発コースに入学した西澤央泰です。出身は、奈良県で、奈良教育大学に在籍し、大学では英語教育について学び、小学校一種、中学校・高等学校（英語）一種の免許を取得しました。拠点校は奈良女子大学附属中等教育学校で、3年生の観察を中心にインターンシップを行っています。

大学生活で印象に残っていることを2点挙げます。1点目は、部活動です。私は大学1回生の最初から、3回生の最後まで、バスケットボール部で活動しました。監督がいないチームだったので、学生が自分たちで目標を定め、練習メニューを組み、練習に取り組んでいました。部活動を通して学んだことは、「チームで目標を共有することの大切さ」です。ただ単にやみくもに練習をするのではなく、チーム全体での目標を明確にし、共有したうえで、目標達成のための注意点を意識して練習に取り組む姿勢は、大学時代に身に着けた価値ある考え方の1つです。この姿勢は、4月上旬から始まったインターンシップで、学校内の各組織、行事、授業の目標を理解し、目標達成のためにどのような取り組みが行われているのか考えたり、実際に部活動を見る際に意識していきたいと思っています。

2点目は、教育実習です。私は、大学在学中に、中学校と小学校の教育実習に行かせていただきました。中学校実習は、奈良女子大学附属中等教育学校で英語の授業をさせていただき、知識習得型の英語の授業

だけでなく、生徒が今まで学習したことを使って応用のコミュニケーション活動を行っていく、プロジェクト型の授業もさせて戴き、その難しさと意義を知ることができました。この教育実習の中で、「生徒のコミュニケーション能力は、知識習得型の授業によってのみではなく、プロジェクト型学習で、実際のコミュニケーションに近い状況で使用することで向上する。知識習得型のみになりがちな英語の授業の中で、どのようにして、プロジェクト型の授業を取り入れ、コミュニケーション能力を向上させるか」という問いも生まれたので、長期実践の中でこの問いを考えていきたいです。また、小学校実習では、教員は指導者として教えず、児童に課題を提示し、児童同士がその課題について話し合い考え、それを教員が引き出して全体に共有し、児童の学びに戻すという形態の授業を見せていただき、自分も実践しました。そこで、児童たちが協働の中で学んでいく様子を間近で見ることができました。このように、教育実習では、教科特性や発達段階に応じた授業形態があることを学びました。同時に、両方の教育実習で「授業中の児童生徒がどのような学びを得ているかを見ること」が大切であると教えて戴きました。今のインターンでも、生徒が授業内でどのような学びを得ているかについて特に注意して観察していこうと思っています。

上に挙げたように、自分が今まで得た学びと問いは、大学院での学びを深化する要素にあふれていると考えています。これら大学で得た学びと問いを大学院での授業実践、研究に生かし、教員として現場に立つための力をつけていきたいと思っています。よろしくお願いいたします。



藤田 若奈 ふじた わかな

教職専門性開発コースに入学しました、藤田若奈です。今年度から福井大学・奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学の三大学が協働した教職大学院が設置され、私は奈良女子大学附属小学校でインターンシップをさせていただきます。

私は幼稚園から奈良女子大学の附属で育ち、先月、奈良女子大学を卒業しました。大学では、母校の教育を学び、母校で教育実習やスクールサポーターをさせていただきました。小学生のとき一年生から六年生まで毎日書き続けた「日記」、朝の会でひとことお話をする「元気しらべ」、学習の最初と最後に毎回自分で考えて書く「めあて」と「ふりかえり」、一日の生活や学習を進行する「日直」、全てのことに先生の子どもに対する願いが込められていること

を知りました。それは教師になるための学びとしてはもちろん、私にとって自分自身の受けてきた教育を意味づけることができ、これまでの学びや生き方を振り返る機会となりました。今度は私が子どもたちに願いを込めて、実践を行っていきたいと思います。

卒業生ということもあり、まわりから「奈良女ってどんな教育?」「附属だからこういう教育ができるんでしょ。」といった質問やコメントを頂くことが多くありました。それに対して自分の言葉で上手く説明することができず、もどかしさを感じていました。奈良女を離れたとき、自らの学びを自分の言

葉で語り、信念を持って実践をしたい、そのような思いからこちらの教職大学院への入学を決めました。インターンシップでは、子ども理解を深め、子どもの姿から授業づくりや生活指導等のあり方を考えていきたいと思います。また、奈良女を出たことのない私にとって、校種や地域等の枠を超えた院生さんや先生方との交流は刺激的であり、新たな視点を与えてくださいます。一つ一つの出会いを大切にし、私も受信するだけでなく、自らの実践を語り、課題や迷い、葛藤を共有し、お互いに教育の質を高め合える発信者となれるよう、努力してまいります。

二年間、よろしくお願いいたします。

実践研究福井ラウンドテーブル 2018 Spring Sessions

Zone A ラウンドテーブルに参加して

信州大学教育学部附属松本中学校 矢島 裕文

数十年ぶりという福井市の大雪のニュースが連日報道される中、長野県の遠方からではありますが、今年のラウンドテーブルが無事に開催できるか案じておりました。各方面への連絡や構内の雪かき等、運営の方々の多大なご尽力があったこととお察しいたします。

さて、実は私自身は福井の地に赴いたのは初めてではなく、2015年のスプリングセッションに参加させていただいたり、本校の研究について松本健一先生を訪ねてご指導をいただいたりしたことがあり、今回で4度目の福井となりました。また、福井県と長野県は教育に関して様々な連携があり、何かと身近に感じていました。そのような折に、本校の取り組みについて発表する機会をいただきましたことは、学校にとっても私自身にとっても大変貴重な機会となりました。本当にありがとうございました。

さて、ゾーンAのテーマが「子どもたちのコミュニティを支える教師のコミュニティ～実践の継承と新学習指導要領を踏まえたこれからの学校づくり～」ということでありましたので、本校が5年間にわたって取り組んできた「ゆたかな学びを創造する学校づくり」について発表させていただきました。私たちが授業を構想するときに特に意識していることは「問いが子どもから立ち上がっているか」ということだとお話しさせていただきました。指導案で単元展開を検討するときには、子どもの意識が途切れた

り飛躍したりしているところが見つかります。経験を積んだ同僚からそのような箇所を指摘してもらうことで、私自身の授業の視点も磨かれ、子どもの学びのいきさつというものを考えることができるようになっていきました。本校ではこのようにして先輩からの助言、先輩の実践から学ぶことで授業づくりや学校づくりの視点を継承してきました。

また、本校の特色の一つでもある中学校での「学級総合」の取り組みについては、学級担任が総合的な学習のカリキュラムをゼロから創っていく様子をエピソードとともにお話ししました。生きた現実と向き合った子どもたちが、様々な「もの・ひと・こと」にふれながら自らの学び方や生き方を深めていく姿を見ると、学級担任は、もがきながらも充実感を味わうことができます。校内には、あちこちに総合の時間における子どもの学びの軌跡が残されています。「実践の継承」とありますが、総合の時間にどのようなことを学びたいのかということは、実は子どもたちの間でも共有されているのだと感じています。

コメンテーターの牧田先生からは、本校が取り組んでいる幼小中一貫教育のカリキュラムの構築について、三つの校園が同一歩調で事を進めていく際の苦労に触れていただきました。その過程では、各校園がこれまで積み上げてきたものを崩していかなければならない場面にも直面しますが、牧田先生には、そこにチャレンジすることの大変さを汲んでいただ

いた上で、エールを送っていただいたように感じています。

このような大舞台で、しかも、阪本先生や西田先生のように歴史ある奈良女子大学附属小学校の先生方と同じ場で本校の実践を発表させていただいたことは、大変恐縮でありましたけれども、私自身が本

校で学んだことを振り返り整理することができました。コーディネーターの綾城先生にもこちらが不慣れなところをフォローしていただき、何とか無事に発表することができました。改めて、このような機会をいただいたことに感謝したいと思います。

Zone B2 ラウンドテーブル 2018 スプリングセッションを終えて

連合教職大学院 准教授 大西 将史

Zone B2 教師教育では、武蔵野美術大学の三澤一実先生のグループによる「旅するムサビ」プロジェクトについてご報告いただいた(session1)。4名の学部生による教育・福祉現場に入り込んだ意欲的な活動をご報告いただき、とても刺激を受けた。

Session2 では、学部学生、教職大学院生に加えて現職教員及び大学教員等を加えた混成グループでのディスカッションを行った。Session1 に対する意見を交換しつつ、学部学生2名より自身の大学における活動について報告いただいた。議論に十分な時間が取れなかったが、静岡大学における実際の授業作りを射程範囲においた授業研究と、福井大学における附属学園での参与観察と振り返りを軸においた授業の報告から、学生が実践的な活動を通して主体的に取り組んでいる様子が窺えた。

Session3 では、学生・院生と教員が別々のグループでディスカッションを行った。三品先生(中部大学)からは、学生のフレンドシップ活動を支える実践から、「失敗してもよいような教員側の送り出しが必要」といった内容の報告をいただいた。現場の教師の立場から、深澤先生(静岡県立駿河総合高校)からは、学校の内部にとどまらない「様々な専門性を持つ人とのつながりの重要性」を、市川先生(信州大学大学院・飯田市立松尾小学校)からは、「まずやってみるということ。そしてそれによって学校は変わるということを学生が体験できることが大切ではないか」ということ、鎌倉先生(信州大学附属長野中学校)からは、「開かれた学校をつくるために自分が変わることが大切ではないか」といった内

容のご報告をいただいた。皆川先生(宇都宮大学)からは「学校現場からの学び―理論と実践の往還―」ということをご示唆いただいた。私は、前のセッションで報告があった学生たちの活動に共通することとして、学生の主体的な学びへの姿勢とそこから生まれる実質的な学びを表現するために「学習者にとって意味のある問いが活動・学びを創り出す」ということを提案した。これらを受けて、大学の教員養成に求めることとして、なぜ教師になるのか、どんな教師になりたいのかといった教師としての原点となるような問いについて考える機会の必要性や、現場における教えねばならないことと個人としてやりたいこと、やりたくないことのギャップ、また、子どもの実態と教師が子どもに取り組まねばならないことのギャップ、そのギャップの背景となるような各教師の個人的価値観にまで議論が及び、単なる価値観にとどまらず、それが教員のコミュニティにおいてある程度共通する水準があるはずであり、それについて個々の価値観を超えた専門家の共通の土台として調和・協調させる機会も教職課程において必要ではないかといった議論が行われた。

本ゾーンの活動は、学生から生の声を聴きつつ、大学教員や現場の教師が教員養成について語り合うことで、それぞれの取り組みの意義を考え、これまで見えていなかった課題について議論し新たな展望を見出す機会を提供している点で意義深い。しかし、限られた時間で今回のように多くの内容を盛り込むことの難しさもあり、セッションの構成には改善の余地があるといえる。今後の課題としたい。

実践研究福井ラウンドテーブルで得た視点

武蔵野美術大学 4 年 神谷真帆

ZoneB2にて私たち武蔵野美術大学の学生は、1 日目のポスターセッションと実践発表、2 日目のラウンドテーブルに参加させていただきました。

1 日目のポスターセッションでは、自分たちが作ったポスターの前に立ち実践報告をさせていただく中で、各々が行ってきた活動をもう一度見直すことができました。特に質疑応答の時間に「活動の中で子供はどんな様子でしたか？」という質問を受けた際には、活動中の思い出やその時に感じた手応え、そして何より子供達の声が思い起こされ、夢中で話をしていました。発表する場に慣れておらず話し方がたどたどしくなることもありましたが、自分たちの活動を伝え、語ることはとても楽しい体験でした。また、他の実践発表を聴いて回ったことも刺激になりました。美術以外の他教科や幼児教育など普段触れる機会がない私たちにとっては、多様な領域における実践を基にした発表はとても興味深く、自分たちの活動と連携することが出来るか考えながら聴くことができました。

ポスターセッション後には、大学のホールにて武蔵野美術大学が行っている「旅するムサビ」の実践発表をさせていただき、その後にグループセッションを行いました。グループセッションでは、同じ学生の立場からの意見が多く聞けたことが印象に残っています。私のグループでは「対話型鑑賞に子供の作品を使ってみたらどうか」という意見が上がり、子供の作品を共有することでより深い学びが生まれるのではないかとという話し合いをしました。学びの

分野は異なっている、独自の視点から私たちの活動について考えて下さった学生の方々の意見はとても参考になりました。

2 日目のラウンドテーブルでは、より様々な視点から学校教育を見直すことができました。中でも私が一番興味深かったのが管理職の先生から見た教育の姿です。大学生である私は実際の学校現場を知りません。そのため、学校を管理する立場にある先生から見た教員の姿や教育の形を聞いたことは、これから現場に向かう私にとって心の準備を整える機会にもなりました。

2 日間の活動全体を通じて、普段とは別の角度で美術教育を客観的に見ることができました。美大に通っていると周りは美術が好きな人ばかりです。そのため、美術を苦手とされている先生の意見や、他教科の先生が美術教育に対してどのような印象を持っているのか聞く機会は滅多にありません。今回の機会美術関係以外の方々から見た美術教育の形を知ることができました。それを踏まえた上で、今回のような実践報告は美術教育の意義を伝えるのに非常に重要な役割を果たしているのだと思いました。そして何より、教育観を共有することがこんなに楽しく、充実したものであると知ることができたのが一番の収穫でした。

最後になりましたが、福井大学の先生方、学生の方々、お忙しい中、私たちの実践発表を聞いていただきありがとうございました。

ラウンドテーブルを通して得た深い学び

静岡大学教育学部学校教育教員養成課程 初等学習開発学専攻 2 年 本橋 香奈

静岡大学初等学習開発学専攻は、2016 年度に新設された専攻です。その 2 年生と 1 年生の 5 名が、「B 教師 ②これからの教員養成を学部・大学院を通して考える-実践を聴き、夢を語る」に参加しました。以下は、このセッション②に参加した 5 人の学生の感想です。5 人全員が良い刺激を受け、教職について深く考え直す機会となりました。ありがとうございました。1 人の感想ではまとめきれなかったため、5 人の感想をまとめて載せさせていただきます。

私は今回初めて他大学の学生と意見交換を行った。学生でありながらも皆様々な考えを持っており、大学を通して多様な経験をしている。自分はまだ教師になるには考え方も経験も未熟ではあるが、学生時代に考え苦しんだことが教師になった時に役立つのではないかと感じた。実習を増やして欲しいと参加する前は思っていたが、実習も大切ではあるが教育について学生、現職の先生方、大学の先生など様々

な立場の方々と話をし、自分の考えを深めて多様な考え方を得ることが今の自分には必要であると思い、良い経験になったと思う。 2年 本橋香奈

私はこの機会が自分を見つめ直す為の良い機会になった。ラウンドテーブルには教員を目指す学生や大学院生、現役の教員、大学の教員など様々な人が集まって交流を行った。その為多くの人の考えに触れることができ、意見交換をしていく中で自分がどのような教員になりたいのか、教員になる上で必要な事は何なのかということについて考えることができたと思う。 2年 松本佳菜

他の大学の方と話すことによって、同じ教育学部でも何を重視して学ぶのかという点において全く異なっていて、これから自分は何にもっと取り組んでいくのか、今の自分の学びには何が足りないのか考えることができた。同じ立場でも大学によっても取り組む内容は全く違うのだから、こうやってお互いに取り組んでいる内容について語り合い、自分達に足りないものに気づくということはとても重要なことだと思った。 1年 西村亜莉沙

「教師としてできること、教師を目指す者としてできることは何か」や「教師と子供はどのように学んでいくのか」といった様々な疑問について、他大学の学生や院生、教員と深い話し合いを行うことができた。そして、今回様々な人と交流をし、対話を通し、自分の視野を広げるとともに多様な価値観に触れることができた。今回「対話」を多くの人とすることで、次期学習指導要領でも大切な視点とされている「対話的な学び」が子ども達にとって、さらに教員側にとっても深い学びにつながるのだと、改めて実感することができた。 2年 田中秀佳

他の大学の学生や教授、現職の先生方とお話しさせていただく機会というのは今までになく、とても勉強になった。自分が1番印象に残っているのは、「教師は、子ども達にどんな力を身につけさせたいかということよりも先に、子ども達がどんな子に育ってもらいたいかを最初に考えるべきだ」という、富山大学の教授新タ義典さんのお話である。これはこれからの教育を考えていく上で根本となる理念だと思うので忘れないようにしたい。 1年 長田和希

Zone C 持続可能なコミュニティをコーディネートする つながりの編み直しを支える

連合教職大学院 准教授 半原 芳子

Zone C では、この間コミュニティの発展における「持続性」に焦点をあて、長期に渡る実践を検討しています。今回もそれを引継ぎながら、また新たな視座として、コミュニティが持続していくために不可欠な「つながりの編み直し」に注目し、「持続可能なコミュニティをコーディネートするーつながりの編み直しを支える」というテーマで、コーディネーターの役割やその力量形成について、世代や立場を超えた多様なメンバーと実践の交流・検討を行いました。

まず、Session I ポスターセッション（ナレッジフェア）では、福井市・越前市の公民館主事、ふくい市民国際交流協会の職員、福井大学探求ネットワークの学生達がポスターにて自分達の取り組みを報告しました。今回 Zone C からは、おそらくこれまでのラウンドテーブルでは最多の33ものポスター報告がありました。Zone C は1年ぶりの文京キャンパスでの開催ということもあり、普段なかなか聴くことが

できない社会教育や地域活動の取り組みに足を止める学校の先生方も多くいらっしゃいました。

Session II シンポジウムでは、京都市役所京都市まちづくりアドバイザーの谷亮治さんと、福井市中央公民館主事の田村栄子さんをシンポジストに迎え、上記テーマについてお二人の取り組みから考え進めました。谷さんからは、京都の伏見区で継続的に取り組まれている「伏見をさかになにぞっくばらん」などの事例が報告されました。京都は伏見区だけでも30万人近くの人口がおり、そのなかで谷さんをはじめとするまちづくりの専門家チームが住民の主体性と多様性を大事にしながら「愚直な」コミュニティづくりに取り組んでおられます。谷さんらの失敗を含んだ試行錯誤は、コーディネーターの役割と、コーディネーターが学び続けることの大切さを教えてくれるものでした。田村さんは、福井市の公民館主事として46年間に渡り住民の地域活動を支えておられます。田村さんは地域の「長い取り組み」を大事

にしておられ、その地域活動によって培われる住民の力はまさに自治の力であると感じました。また、福井に豊かな社会教育の土壌があるのは、住民と田村さんをはじめとする福井の公民館主事さん達の協働実践とそこで発展していく知恵、さらにそれらが次の世代に受け継がれていくような双方の力量形成とそれを支える仕組みづくりを田村さん達が手がけていらっしゃるからなのだと思います。シンポジストのお二人の報告を受け、フロアからは自分達の状況や実践にもとづく質問やコメントが寄せられました。そこでのやりとりのなかで、谷さんと田村さ

んの実践が、更により良く検討されたように思います。

SessionⅡの雰囲気を引き継ぎながら、SessionⅢフォーラムでは約130名の参加者が5~6人のグループとなり互いの実践を交流し合いました。探求ネットワークの学生の報告が中心でしたが、今回、工学部の学生や社会教育委員の方、学校の先生方の参加が多数あり、探求ネットワークの学生の取り組みの意義が様々な角度から照らし出されていくのが印象的でした。

ラウンドテーブルでの学び(聞く・語る)

越前市南中山公民館 主事 辻岡 秀美

越前市には、小学校区17地区に公民館が配置されています。同じく、地域づくりの自治振興会という組織も、17地区にあります。人づくりと街づくり、線引きが難しい中で、誰もが足を運んでくれる敷居の低い公民館を目標に、いろいろな取り組みをしています。なかでも当館は、児童館が併設されているという利点を最大限活かした【放課後子ども教室】では、いろいろな事にチャレンジしています。本の日(月2回、図書館司書による読み聞かせ)、茶道教室(月1回、地元自主講座講師が兼任)、ジュニアウクレレ(月1回、地元自主講座生が兼任)。長期の休み中は、県のサイエンス事業や環境アドバイザー事業の利用、料理教室、そうめん流し等々。また、“地区の子どもは地区で育てる”という、地域の方々の力強い後押しのもとで開催できる合宿通学は、家庭でも学校でも、多分見る事ができない子どもたちの一面を見て取れる、とても貴重な時間を与えてもらっていると、感じています。

どの事業にもつきものである産みの苦しみと、育ての悩みが、とてもちっぽけな事に思えるほど、履修証明プログラム「学び合うコミュニティを培う」の2年間の受講と、計4回参加させていただきましたラウンドテーブルが、私にとっては、貴重な体験となりました。住んでいる所も違えば、職種もさまざま。自分より年配の方々に、若い学生さん。4回ともにメンバーに恵まれ、気持ちの持ち方次第で、方向性が変えられること。良い意味での開き直りかた、息抜きのしかた。一歩下がること＝あきらめではないこと。

自分は、狭い視野でしか判断できなかったことを、幾度となく反省させられました。

異文化交流は、話合いの中からヒントを得て、立ち上げた事業(教室)です。

道徳の授業材料に苦慮されている若い先生のお話をお聞きして、家庭教育が基本ではあるけれども、時間をかけて作られる授業があつてこそ、いつもトイレのスリッパを並べてくれるような、子どもの姿があるのだと、感じました。

ある学生さんに、成人式で、何十年ぶりに公民館へ足を運んだけれども、自分の頭の中に公民館はないと言われ、青年層の課題をここでも感じました。南中山の始めたばかりの青年学級は、いつかそこに花が咲くことを願って、地道に細く長く育てていこうと、改めて思いました。

平成30年3月、受講が無事終了しました。私の場合、主事になり3年目、市の担当課からの業務命令で、否応なしに受講させられたという感の中での始まりでした。が、

「記録を取る、残す大切さ」は、時間を追うごとに身体にしみついてきました。

地区の方々ととのなにげない雑談の中で、ふと疑問に思ったことなど、何気なく書き留めておいたものが、後になって言わんとすることが理解できたり、突っ走りそうになる自分を、落ち着かせることができたり、失敗の繰り返しを防いでくれたり等々、一呼吸間を取る余裕が持てるようになりました。

越前市の主事は異動がつきものです。この2年間の学びと出合いを糧に、これからもその地区その地区

での人づくりの、縁の下の力持ちでありたいと、思っています。

最後になりましたが、柳澤先生、半原先生、ありがとうございました。このご縁を深く感謝いたします。

Zone D ラウンドテーブルを通して、教師としての生き方を探究し続ける

敦賀市立松陵中学校 山田 晃大

福井大学教職大学院を修了し、現場の教員となり、1年が経った。初めての学校の文化に慣れられなかった1学期前半、6月に参加したラウンドテーブルは、私にとって、教員生活のスタートラインを捉え直す機会となった。生徒たちの様々な活躍が見られる部活動での指導に意欲を燃やした1学期後半、やっと日々の業務に慣れてきた2学期前半、生徒と共に歩み直せた2学期後半、こうして1年間を振り返り、「新たな夢のゴールに向かっているのだ」と歩みを捉え直せた3学期、私の教員生活1年目はこのように過ぎていった。

2月に開かれたラウンドテーブルを振り返る。1日目、Zone D 前半の「シンポジウム」では、フィリピンとマラウイ、若狭高校といった国内外の先生方が授業改革についての発表をした。それぞれの発表から、国や文化が違っていても目指している方向性は同じであると感じた。「『主体的、対話的で深い学び』によって『資質能力の三要素』をバランスよく育てていく」このための教育改革が今、世界的に行われているのだ。

後半の「フォーラム」では、信州大学附属松本中学校(以下、松本中)や福井大学教育学部附属義務教育学校(以下、福大附属)の「授業研究の展開」について発表をお聞きし、それらをもとに参加者の方々と語り合うことができた。

松本中の発表内容は、生徒たちが主体的に進めてきた総合的な学習の時間についてであった。松本中学校には昨年度の10月に、訪問させていただいた経験がある。ちょうど、このNews LetterのNo.91にてそのときの学びは記録されている。私が訪問したときに、中学3年生が行っていた取り組みを、当時の1年生が引き継ぎ、今に至る。今回の発表は、その取り組みが、まるで筋書きのないドラマのように展開していった、その歩みについてであった。

福大附属の発表内容は、9年間の義務教育をダイナミックに再構築していく挑戦が、今どのように進んでいるのかについてであった。「関係を探り構造をつかむ」。これは、中学校数学科の「核となる学び」として、義務教育学校になる前の附属中学校が

掲げていた言葉である。数学でこそ経験できる学びが端的に表されており、教職大学院在学時の私は、すごくこの言葉が好きだった。義務教育学校となった現在、数学科が掲げている言葉は「何気ない疑問を数学を通して考え、解決していく能力を育てます。」だ。これまでの実践を踏まえ、義務教育9年間を見通すために、再構成されたこの言葉は、まるでこれからの数学教育の、道標のようである。

これらの発表を聞いた先生方は、それぞれの取り組みの魅力について、各々の経験をもとに、話をしてくださった。中でも印象的だったのは、東京都板橋区立赤塚第二中学校からいらっしゃっていた先生のお話であった。校舎を従来型の校舎から今の教科センター方式のものに改築した際、大切にしていたのは、教員の意識改革であったという。松本中の発表はある意味、総合的な学習の時間を通した、先生と生徒の意識改革についてのお話であり、福大附属の発表はある意味、義務教育学校となった今、教師の意識改革がどのように進んでいるのかということについてのお話であったと言える。このように、「フォーラム」におけるグループセッションは、その場の学びを、各々の経験をもとに、語り合いを通して捉え直すものとなった。

ラウンドテーブル2日目の報告では、私自身の教師としての歩みを、語り合いを通して跡付けることができた。「数学の面白さ」を生徒と共に追究していった教職大学院時代の取り組みは、現在の授業実践の足場となっている。在学時、様々な資料をもとにして、知識基盤社会で求められる能力を試す、「大学生版PISA作り」に挑戦した経験は、2月初めに行った道徳の授業実践のための教材研究に生かされた。日々の業務でなまってしまうがちな、広い視野でのものの見方が、この2日間をへて、呼び覚まされた。また今回のラウンドテーブルでは、1日目の「フォーラム」と2日目の両方で、ファシリテーターを勤めさせていただけた。メンバーの経験や考えを推し量りながら、語り合いを通して、それを言葉にし合っていけるよう、努めた。今年の4月からは2年目となり、職場での後輩もできるだろう。担任を持つ

可能性も高い。今回の経験は、必ず4月からの自分に生かされると確信している。

ラウンドテーブルを終えて今思う。実践研究 福井ラウンドテーブルをきっかけにして、自らの実践者としての歩みを捉え直し続けることができていると。6月のラウンドテーブルでは、動き出している1年の歩みを捉え直すことができた。2月のラウンドテ

ーブルではそれを振り返り、今後を展望できた。この様に私は、ラウンドテーブルを通して、教師としての生き方を探究し続けることができている。「学び続ける教師」として、生徒たちの未来のための教育をデザインしていけるよう、これからも努めていきたい。

子供を真ん中において語る

永平寺町志比南小学校 加藤 儀直

「Aちゃん、今日は絶好調やわー」「なんで、こう考えるかがわからんのやけど」。同僚の養護教諭と長い時には30分以上、子供のことについて職員室で語り合うのが私の日課である。お互いの観えていることや感じたことを語っていると、管理職や事務職らも一緒になって一人の子供のことについて語り合う。コーヒーを片手に、椅子を寄せ合って自然に広がっていく輪は、どこの学校でも観られるような光景である。

【児童/生徒を中心に】

報告のあった事例は、福井で学んだ授業研究を自分の国に持ち帰り導入を試みようとするものであった。しかし、報告の中でも指摘があったように生徒主体の学びを創り出そうとするとき、先生方の不安が多くあったと言う。そのような中でも一度実践をし、授業後に検討会を持つと、多くの先生方が生徒主体の学びの意義を感じ取っていた。日本での事例は、伊那小学校の事例などが報告された。ここでも、子供の姿を同僚と語り合い実践を進めていくことの報告がされた。

しかし、最終日のセッションでは子供の姿を当り前に語り合うことができないという報告があった。インターンという立場で実習に取り組んでいるAさんは、「教師と子供の関わり方」に重点をおいて日々の実践に取り組んでいる。2017年4月からの実習は楽しいことばかりだけではなく、「つらい」「しんどい」と感じることもあったと言う。詳しくは、Newsletter No. 107 や現在執筆中である長期インターンシップ報告書を検討していただきたい。Aさんの場合は、大学院生という立場であり、毎週定期的

にカンファレンスをして自らの実践を省察する「場」があったので、実践してきたことを捉え直し新たな視点を得ることができていた。しかし、メンター教員とのカンファレンスは大学でやっているようにはいかず、悩むことが多かったようだ。

【いろんな見取りがあることで、深い理解になる】

最終日のセッションでは偶然ではあったが、学校のしんどい現実と日々向き合ってきた経験のあるメンバーが集まった。子供たちにとって、学校は何かを学ぶ場である以前に「安心・安全な場」でなければならないことが、グループの中で共有された。そのためには、「若手」「ベテラン」関係なく、一人一人が見取った子供の姿を語り合い、たくさんの視点から捉えていくことがとても重要になる。本来なら、日常的に子供の姿を語り合っているはずだが、Aさんのように悩んでしまうケースもあるので改めて子供の姿を語り合うことの必要性を感じた。

【ゆるやかなつながりの中で】

授業だけでなく日常の子供の姿、係の仕事をしているときの子供の姿。子供たちが見せる姿は、その時々で大きく違う。もしかすると、私の知らないところではいつも見せない姿を見せているかもしれない。おそらく、最終日のセッションでAさんが報告したことの多くは、子供がいつもはみせない姿を伝え、語り合うことをしていきたかったのだろう。高いアンテナを張るだけではなく、一人一人のことについていつでも語り合うことのできる「ゆるやかな協働関係」がある実践コミュニティをいつも意識しておきたい。

ラウンドテーブルに参加して

高浜町保育実践研究グループ ぴっか

昨年度に引き続き、ラウンドテーブルに参加させていただきました。前回、参加した時には、学校関係の方や、教育に携わる行政の方の割合が多く、「参加して良かった」という手ごたえを得たと同時に、心細さも残り、幼児教育の立場からの参加が増え、子どもたちの学びや、育ちについて語り合えるコミュニティがもっと広がってほしいと感じました。しかし、今回は幼稚園、保育所、認定こども園などの参加も多く、幼児教育を語り、傾聴していただける機会が増え、大変嬉しく思いました。また、様々な職種の方の実践報告を聞くことで日頃は味わえないような刺激を受け、有意義な時間を過ごすことができました。

昨年度は ZoneA でシンポジストとして保育実践を報告しましたが、今回はポスターセッションで参加しました。ポスターの制作は今回が初めてで、どうすれば伝わるのか、本当に伝えたいことは何なのか、など、たくさん悩み、推敲してなんとか完成させました。研究してきた内容を可視化することで、実践の中で何に重きを置いてきたかが明確になりました。そして、ポスターを用いて参加者に実践内容を伝えることは、発表者の表現力や説明力を高めることになり、ポスターセッションに馴染みのない私たちにとっては難しさもありました。しかし、一生懸命取り組むことで、発信することの本質に少し触れられたように思います。また、参加者からの質疑を通して、考え直すことや、追求すべきことに気づき、より学びが深まりました。

シンポジウムでは ZoneD に参加し、日本に限定されず海外の授業研究についても知ることができました。初めは、学校教育がテーマの中心で、やはり保

育士の私たちは、場違いなのではないかと心配していましたが、参加してみると海外と日本においても、学校教育と幼児教育においても、共通した取り組みや、課題があることに気づき、次第に話に引き込まれていきました。例えば、研究授業を実施し日頃の教育を省察し改善していくことは、保育所で実施している公開保育や意見交流会に匹敵すると感じました。学校でも保育所でも、子どもを取り巻く環境や密な職員連携が重要で、それを高めていくために日々葛藤する姿が共通すると感じ、私たちの取り組みにも自信を持てました。

フォーラム後の小グループでの交流は、様々な立場の方が集まり、「保幼小の実践に学び合う」というテーマの下、お互いの実践を語り合いました。様々な立場からの参加ゆえに、まずは自分の所属している場を知ってもらうところから始まり、それぞれの現状を赤裸々に明かしていくこととなりました。同じ職種が集えば、「分かっていること」「掘り下げるべきではないこと」と勝手に思い込み、流れてしまうような事柄が、ここでは丁寧に話され、自分では気づけなかった新たな発見に出会うことができました。その発見の内容ももちろんのことですが、ここでの、立場に関係なく認め合いながら話を進めていく感覚が新鮮で、とても心地良かったです。

今回のラウンドテーブルでは、報告者としても、聞き手側としても、刺激的な1日でした。ラウンドテーブルに参加するたびに学びがあり、私たちの力となっていく実感があります。保育者として成長していくために学び、挑戦し続ける姿勢を大切にしたいと思います。



Round Table Cross Sessions

実践の長い道行きを語り 展開を支える営みを聞き取る

これからが肝心

学校改革マネジメントコース2年/金津東小学校 虎尾 茂樹

今年の冬は37年ぶりの大雪で、県内各地で大きな被害が生じた。私が住む坂井市の自宅付近も、一晩中、激しく雪が降り続け、朝起きてみると家の周りは1メートル近くの雪に覆われてしまっていた。車をガレージから出そうと早朝から除雪を始めたが、その間も雪は降り止まず、その日は出勤を諦めざるを得なかった。次の日、ようやく車をガレージから出したものの、至る所で道路が不通となり、いつもなら10分程度でいける学校に2時間半もかかってしまった。学校に着いても、除雪は全く入ってお



らず、まずは自分の車を止める場所を空けるための除雪から始まった。同僚も少しずつ集まりだし、人力で学校の前の除雪から始めた。

家でも除雪、学校でも除雪と毎日、朝から晩まで雪かきに追われた1週間であった。物流もストップしてしまい、いつもならスーパーやコンビニに当たり前にあるパンや総菜等の食料品がほとんど手に入らなくなってしまった。まさしく雪害であった。しかし、こんな中でも良かったと思えることがあった。それは、家族みんなで過ごす時間が増えたことである。朝昼晩の三食とも一緒に食べ、雪かきや徒歩での買い出しをみんな で協力して取り組むことで、家族の絆が強まったのだ。さらに日曜日は区民総出の除雪デーとなり、若者から年配者までが協力して区内の道路の除雪を行った。午前中のみ作業であったが地域の絆も感じる事ができた。大変な1週間ではあったが、自然の脅威と人間の非力さを改めて知ることができた。そして、普段のあたりまえの生活が如何に有り難いことであるか、さらには困難を乗り越えるためには、家族や地

域の絆が如何に大切かを再認識することができた貴重な1週間でもあった。

2年間の教職大学院での学びも、ある意味、この大雪の体験と似通っているのかもしれない。毎月のカンファレンスでは異校種、異年齢の先生方と繋がることで多様な価値観に触れることができた。また、ラウンドテーブルでは、全国の熱量あふれる先生方の実践と繋がり、大きな刺激をいただいた。そして夏季・冬季集中では分厚い理論書や過去の自分と繋がることで、これから先、歩むべき道標を得ることができた。私はこのような経験を通して、激しい教育改革のうねりの中においても、ぶれてはいけない軸というものを再確認することができたと考えている。私にとっての軸は『絆』である。人は様々な繋がりの中で生きているのであって、決して一人では生きられない。小学校で英語が教科化されるのも、世界中の人たちとの繋がりを深めるためであり、道徳が教科化されるのも人と人との繋がりを大切にしたいからである。このように様々な繋がりが太くて丈夫になったものが『絆』と言えるのだ。そういった意味で、私はこの福井大学教職大学院と太い『絆』を結ぶことができたのではないだろうか。しかし、この『絆』は放っておくとどんどん細くなりいつかは切れてしまう。大切なのはこれから先なのだ。ここでできた『絆』をもっと太く頑丈なものにしていくためには、意識的に働きかけをしていく必要がある。大学側としては、修了してしまった院生にかまっている時間はないのかもしれないが、私としては、今後も積極的に繋がりを求めていきたいと考えている。そのことが、教育者としてだけでなく、一人の人間としての資質・能力を高めてくれると思うからだ。まずは、6月のラウンドテーブルに参加させていただき、全国の優れた実践者からエネルギーをもらいたいと考えている。

終わりに、学校現場で様々な校務をこなしながらの2年間は、かなりきついときも確かにあった。しかし、私が子ども達にいつも言っている「苦しいとき、辛いときが伸びるとき」を自分に言い聞かせな

がら何とか無事に終わりを迎えることができた。これも私達を支えてくださった指導教官や大学院スタッフの皆様のおかげであると、本当に感謝してい

る。最後に、福井大学教職大学院が益々充実、発展していくことを祈念して筆を置かせていただく。

開講式

桜が満開に咲き誇る2018年4月7日（土）の午後、連合教職大学院の出発となる、平成30年度の開講式が行われました。今年度は教職専門性開発コースに8名、ミドルリーダー養成コースに17名、学校改革マネジメントコースに12名の計37名が入学しました。また、新たに2名のスタッフが加わりました。

開講式では、松木研究科長から挨拶があり、歓迎と激励の言葉が述べられました。話に熱心に耳を傾ける1年目の皆さんの様子から、緊張の中にも、これからの協働探究への期待や新たなチャレンジへの決意が見てとれるようでした。

その後、スタッフから年間計画や4月の合同カンファレンス、拠点校や連携校の担当教員、履修手続き等の説明があり、記念撮影が行われました。また学校別分科会も行われ、1年目から3年目までのメンバーおよびスタッフが一緒に今年度の展望や連携について話し合いました。そこでは1年目の皆さんも打ち解けた様子で語り聴き合っておられ、連合教職大学院らしいスタートになったように思います。

1年目の皆さん、ご入学本当におめでとうございます。これからどうぞよろしくお願いいたします。

（荒木・稲葉・高阪）



4	1 日				
	2 月				
	3 火				
	4 水				
	5 木				
	6 金				
	7 土	開講式(1・2年ともに出席)13:30-15:30			
	8 日				
	9 月				
	10 火				
	11 水				
	12 木				
	13 金				
	14 土				
	15 日				
	16 月				
	17 火				
	18 水				
	19 木				
	20 金				
	21 土	月間合同カンファレンスA(9:30-17:00)			
	22 日				
	23 月				
	24 火				
	25 水				
	26 木				
	27 金				
	28 土	月間合同カンファレンスB(9:30-17:00)			
	29 日				
5	30 月				
	1 火				
	2 水				
	3 木				
	4 金				
	5 土				
	6 日				
	7 月				
	8 火				
	9 水				
	10 木				
	11 金				
	12 土				
	13 日				
	14 月				
	15 火				
	16 水				
	17 木				
	18 金				
	19 土	月間合同カンファレンスA(9:30-14:00)			
	20 日				
	21 月				
	22 火				
	23 水				
	24 木				
	25 金				
	26 土	月間合同カンファレンスB(9:30-14:00)			
	27 日				
	28 月				
	29 火				
	30 水				
	31 木				
6	1 金				
	2 土				
	3 日				
	4 月				
	5 火				
	6 水				
	7 木				
	8 金				
	9 土	附属幼稚園公開研			
	10 日				
	11 月				
	12 火				
	13 水				
	14 木				
	15 金				
	16 土	教職大学院カリキュラム説明会(13:00-14:00)			
	17 日				
	18 月				
	19 火				
	20 水				
	21 木				
	22 金	プレセッション(17:30-18:40)			
	23 土	シンポジウム(13:00-17:40)			
	24 日	ラウンドテーブル(15:30-14:40)			
	25 月				
	26 火				
	27 水				
	28 木				
	29 金				
	30 土				
7	1 日				
	2 月				
	3 火				
	4 水				
	5 木				
	6 金				
	7 土	月間合同カンファレンスA(9:30-14:00)			
	8 日				
	9 月				
	10 火				
	11 水				</

返還義務なしの
3年間で小学校教員免許取得プログラムもある
福井大学教職大学院に
いこつさ！

カリキュラム説明会 6月16日(土)
13:00~14:00

説明会等の当面の予定

8月4日 夏期大学院進学説明会
10月20日 秋期大学院進学説明会
1月5日 冬期大学院進学説明会

Schedule

4/21 Sat -22 Sun 4月合同カンファレンス A 日程 4/28 Sat -29 Sun 4月合同カンファレンス B 日程
5/19 Sat 5月合同カンファレンス A 日程 5/26 Sat 5月合同カンファレンス B 日程
6/16 Sat 教職大学院カリキュラム説明会
6/22 Fri-6/24 Sun 実践研究福井ラウンドテーブル Summer Sessions 2018

【編集後記】

東京から福井に赴任してきた身には、道端にチューリップや芝桜が咲いていることがとても新鮮に感じられます。まだ肌寒い日もありますが春を感じます。大学でも、学部の新入生は期待と不安が入り混じり少し緊張した表情で授業に臨んでいます。そして、教職大学院の1年目の皆さんは開講式に続く学校別分科会で、自らが探究し解決していきたい課題を熱く語っておられました。新年度のスタートです。(稲葉)

教職大学院 Newsletter No.110

2018.4.21 内報版発行

2018.5.11 公開版発行

編集・発行・印刷

福井大学大学院 福井大学・

奈良女子大学・岐阜聖徳学園大学

教職開発研究科

教職大学院 Newsletter 編集委員会

〒910-8507 福井市文京 3-9-1